英情賞豹井巻

へ13
3620
1

へ13
3620
1

奬情書物

少汀文庫

奬情買豹之类序

兵は詭道なりといへども。

敵も詭味方も詭らば。

詭何を益のあらん。

奬情は誠なりいぶ。

彼はまことなくしれ

まことなくばその

詭譎がたくさんあるので。此新豹の書を看るものは。よくその訣を生〳〵義井。と云爾

午牡春　天穀亀識

奴情買豹之巻第一

平家代と云て世全年の楽こ尽て衰こ才る。一門の人で一類の罪は数ゆ家の数と義経の弟の頼朝は関東の武士の棟梁と大内の本戸にとゞ定めるる。平家は福原に浮板宿次方鎮る者。十万金清とゞ呼ん抑一の若い。小山田の海に狭くて奥度。巻こして屋敷と云ふ人の矣うゞ。小の上流より西の海の芝浦まで。大石と成れよ。大木と伐て運ぶよひさ。深きあるに大船と例て接栃いさ塚の面に立待よ。宮田清盛の善光田甲斐の善と学こて。奴の吹く。ふり振り鞍面馬十三世字こ〳〵て。芝の仮と。新こ加たと。馬ひいま門脇のあい勢ひ。

三反の田の苗代の事腰の高ふかく植べからざる事

鎮守多く打たくしい。[illegible]

川の堀とそこ[illegible]るらぬく入日も[illegible]

故に蒲冠[illegible]花[illegible]今[illegible]

きて雷おそれすのるふ[illegible]

知行[illegible]

[illegible]

[illegible]

の法三昧に入り、さて大師、ものごとをとどめ、
今さやうれいこと、まのあたりの事のごとく、小神童といふ事、
世間未聞の稚人と、ほめ、けいたの所の一部の所望方に、
非奇異にて、彩と、是、考へ、ものしいと、大師の本
法を授られ、大門口にて、こと、南れと、ものさ、
考へ、南方の仏、ものを授り、法と、ものを、
邪人の田の法、結界、方、南、けいた所の事、
組とよび、付ト法せ、南てくるこの考へ、南方、大師、
授りて、要、ものど、事授り、資財、雑、ものを授りこと、
上、ものと、返り、授れ、所の考へ、授れ、ものを授り、そ
ものいふ、南れと、行て、ほりけ、ものを、大師、事の、ものを、
授れ、南の、ものを、南れ、所、南れ、ものを、
先として、ものの、ものの、法、ものを、方に授り、ものの、
方、南の、ものの、ものを、ものを、ものを、ものを、

内、ものを、授れ、ものを、法、授れ、ものを、宿、ものを、貝
人、授の、法人、ものを、授る、一、ものを、授る、法の、
雑、ものの、声、ものを、授る、二、ものを、授る、法、
の、大、授り、事、ものを、授る、法、中、ものを、授る、事、
と、ものを、授り、ものの、中、ものを、ものを、ものを、
見、ものを、宿、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、
ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、
授り、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、
事、ものを、授り、事、ものを、ものを、ものを、ものを、
授り、法、事、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、
授り、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、
ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、
ものを、事、ものを、ものを、ものを、ものを、ものを、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とかうかいてゝ小判の袋でいつもの通りと出ていたれば
一さん紙幣にて往ぜとも申ぜど泥棒の新紙幣
の方ならずまして後ぬけくいたゞきたる紙の
異くさ臭ものゝ味噌ちくぶいて毋ものまかす
ゝとあげて料をおいとゞ力をすゝめて達者よろこる繕はし
後の男小ゝ腰をして名びゝ様びけの程びあげや紙
なりしぶいなやてあいさいぶ紙幣いづれくゝ紙幣
兵衛くて出合ていまくゝざる恵とゝでゝとゝ。
さしあてゝ沢山ぬきとれて蛋つぶして女郎がさ恵
いゝざまてくいるやしいさあゝゝ絵ゝ。
せめてお二ゝ上海てゝぶとたくさんのゝおゝ者とゝ恵べ
無勇ゝ恵ゝ乗ゝも海がわれべ紙も絵もたゝる絵恵
まゝかいゝぶかいゝ恵まゝて麻布てあてゝぶ女郎と
海ゝ二ゝ二あゝてあゝ恵ゝ中ゝ恵ゝ恵ゝ。

分陸人料ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ
恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ
二人ゝ二人ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ
宿の恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ
おゝて恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ恵ゝ

かの神魚とは、時代とかける掌合て神変不測
しんぷんと化を現ずと、抽てかの魚を捕つかまへて調理する
ゆへにこれを保と惟性の中にめづらしき魚とする理のかしこ
きをもつて、鮑と呼び民間者も鮑蝶の口義よい及
ぶべきが往昔あていつる義経公も用いる拍子の
ういとうの和俗そのまの鮑のさびきあへ名
所の産と称せられ、食付ひて、ひとるふ
まとき仇ん物くれば逆の中に今為まて徳つ
ぶ、て、ふ別て廓を称といれ食豊の産と称梅
の作りあてまるしめ、ぐ食品のうらけとのせて、人細
る見ゆきを、元素の命、絶ぶ、抜きを中ぶも
ときに、ふ産とは対義に相て出れば業のかくさびき
あるれば粉皮斜るぶ中に伝びきてこるうち拍は
ぬのやうにて士卒のうるおれば、ぶん据ぬて

士卒ぶ、の拍びの相ふ業のう様を公付て相て
まれる者ぶ、拍れ様妙奈家名いかをぶ
ぶ、ひあれば材ぶ名の賭浦とは出すを中てひ
ぶれば粉皮れまきげて軍の前途を賭浦とは
去抑ぶ、そ、ぶ、そ、ぶ、ぶ、ぶ

つひつづき手力抜て立ぬあるに手まの名綱ぬ世間ばの
くにはぐさはとは尺ぐろ新友ぬて時浦と長祢
ぐすてれ。扨はあのいまの大ねよ新し家法ぬ
ぬ。ぬ。ぬ。先たつれ。とうに流砂の恋と拾級せて。
心懐紙とわかして流したりやせ。ゆるん。まの大ねの中
いて泊ふたあまし新友て害ぬ人の男名て紙を懐
はせ。まとぐ。ぬ。ぬ。よ。さ。ぐ。ぬ。ぬ。ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わらせらるゝ女房おぞらく稚ごゝのいつゝか幸そなれ
ゝの乱のうれへ金で根びきせれ太刀を引
せらるゝとゞい給くの山畠報つとゝかさる女房
れ方へおのゝかせ給ふ云ひもそなれ(家の
太郎太郎播磨守結と云て引ひて稚さうか
幕まゝのあとおせ給ひ来て面くもわやう
ゝなゝ。太郎の山畠ゞいてきさうと。対面へ
拍て来れいそいゝ沙るゝで結ゞさ。ゞ男の
ゝのたも出て宝船のうさとゝうせと出ゆるみて
女房たと打笑て大河内豊後守沙ゞ入て沙る

第三

女房は振れて板東ゞ二反の打。無如思
首日紙の勾践軍中に酒をゝひそ酒を河と
流させ給ふ軍勢て我ゞゞと味ゞとのゝ面ゞ。
三軍の人ゝ我もゝと酒をと酒で大ゝの公ゞゞと

有ゞゝゝ出て太鼓と抽ゞとゞげゝゝみ
いゝて出ゞゝ太刀とゞゝゝ判官も今ゞ身に
ゝゝゝ金ゝゝゝんとゞて面仕の侍生と存ゞ、招れ
稚年魁ゞゞきなゝゝずゝ稚ゞゝ一ゝゝ酒宴と
ゞゞゞ

びけみき高時の人達軍の門出といふし縅場さと
おつちて涌出と結わつり奇よきわの人達ねやつ
つ女女房さご出てゆくかつ見けとみくれ
い橋ふ眼とむさ高しかとあつけけるいぬで
て大和の人達と思しゆ流し沈碎ちるい服軍
の長橋軍とて大和軍の仏おごり軍しおてう
て涌ひつ武い出対みい逢高にせれて負二郎よ
亡ひ名くの左兵衛と先ひそ勇もあるみき新名
のよいつてぬ古人とくたとあごさるく大和ぬ古人と
その例ひ上ぬつてあ合しあごりい。
委と結つれ軍の体ちい結ふれ流涌ふなを
のつつぬ乱面軍と結ふとものずで男士い
戦場い勇縅つひいてもあごとちるるのよ
めどび橋ふるごいつあけいさい和ふと一冠

ちつう事ものく女い留さ歯と合ちるめ臣
武士ちる者の結ちたるむごさ女色のひ行事の物
ちふおもれびふくけされとうくさしぬ河家を
やれ軍の強級とおさひと家ちまよ也眼よ
角て三ておう切てやけきび天ねむ人いちの人た。
体ちい結上の縅縅とさすて五級立の色めも
ふ七ねしぬつさと面とやらげられ関事武士い和紙
く女の出ひい結ふれい上ての体天女風俗と天
ていぬ旅ちるいふいふ雪士のくさ引
とよとい旦ねしぬのあれとひさまに仏ふく
士事と接戸してなつけと言ねとすといぬ仏
とふい情ふ事。色ずび人仏のかふ海じ物の紅い
ふれふぞちふと古ふも侯到ぶく色の仏かさ
武士い仏するぐく回まふりぬと上ぐさのやつちる。

俗ゑ夫の風よりは色もちゝみこふでまつ丸ん京方の
伝の上ある風気と今ゝの義俗が指南して粹方と
いふものあてやんぞ恵ぐこれ乃てい女命よりくまれ。
ひて成りたゝ松を出すぐ面目を失ふおそれ。
気ひきひれい桃水乳おあて性面女ゝうてけいせい
寝もとのぐわゝ今時と荷ゝ粹ぐゝ
三ゝれえゝ恵ゝ恵ゝ丸ん さぐ一人ゝの丈いうとと
愛のぐ簡学ゝたゝくい年寄男ゝい寝女蜀ゝ面
のゝ恵ゝ者ゝ成男ゝ今さゝ見れば知ゝ新ゝさ
する伝ゝ素素の古粹のけいせい桜女をちゝよ世鏡
いなさゝゝ性男の伝作ゝいみをほぐき事性ぐゝ
ゝ未い桃水ぐ中指南ゝて伝ゝ知ゝさけいせいなのび
さ世ゝ性寝もと抜て上ゝさんとゝ恵ゝ者ゝ若ゝと
ゝゝれば学ゝ清ゝのある猪清ゝゝて桃水ぐそぐゝ

性ゝゝゝ丸ゝいゝ丸ゝ性ゝ恵ゝ粹仮の中ゝ
本ゝゝけいせい丸ぐゝけいせいと女ゝけいせいと女ゝの
ゝのゝゝもゝ素ゝたゝ今ゝのゝゝゝ伝ゝゝ
時ゝ丸ゝの粹ゝて新ゝ丸ゝて森ゝゝゝ素新ゝ
ゝゝゝと素ゝぐゝのゝてゝゝゝゝゝゝゝ
伝ゝゝ今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ仁
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぎゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆくふく陸さいぢわるのものなる家すでに判官れい
今の始て世をんなる陸ゆくふく根引すの後おとのと
ぬきうちに行れしぬきを家か無ぞやとなるの長親
くよりけつよう義経ぶひら勢まする事に今とと
らせとなる付れ給の陸ゝもなつの身後ぶ添まして。
うきつとの若患とぶれまたびた振みれさど
きぞこそ平大臣といやどくれしロ外で結あとくと幅
ひろくあるたやまでぶかまてこそひわさおさどれいぜち
でんなおまんのなでいかますまいとおこあい判友家康
うくぶにぶれて横引上北ぶ勢ふてのたまぶ結い無ま
白い歯も見せなとたくさん今いまれいぬいそあくい
み結の白歯いきひそでぶろいて涙さ歯ぶ好
で白歯とみなといてるすぶ無ぶにぶふれて結を
引どいやるまぶ陸無るあそびする家でび度の

義ひまるびよ歌とよろあいとい分りとあるてで
大名のまぶ和ぶあるものつよいたまとまぶまより扶ぶ入
らるる家経ぶ。藤の行とうんてとろれなとひけりしのい。
板ふいぶひろぬ中ぶ本ぶ屋はあて化ぶあるれ。赤面
して怒くれもいまざしぶ。えま家時ひたまぶ。
にてこん神一日ぶ命と強るまさひてさ無るれだ今
割腹まみ結ぜれしとぶて行るあくくいるとせいそ。
家ま筋とあるるぶ。ぶひぶけるさやぶる本ぶあるて数
向とぶるぶおざしぶ。四流をぶさざされとぶつむべ
きるくしぶのまるおのたまけくひ坂ま中ぶ時紙
みそうあんぶ一日ぶくよるぶそるるるねぶ狂ま打
るるぶ人の将陸ちぶくまおもぶさまくと日ぶそふ
けるひ坂ぶ毒ひぶ日とあげやまま合ぶれぶ矢ぶをて
れ家陸ぶとるぬ平とるとにてるぶとぶくるる

H322-13

錦判官朝光

結城七郎朝光